

母親の育見態度に関する研究

— 原家族における生活の影響について —

高橋種昭

(日本総合愛育研究所)

目的：現代における親子関係の変化は、まことに著しいものがあり、過去における上下の倫理“家”の意識に基づいた封建的な親子関係というものは影をひき、民主的な人間平等の思想に立脚し、愛情を中心として営まれる新しい“家庭”が生まれつつある。

しかしながら相談事例などを通じてみられる親の子どもに対する育見態度や教育態度には、彼等が育った家庭における親子関係や兄弟関係などが大きく影響していることは明白な事実であり、現在新しくつくられつつあるものの如くにみえる親子関係の裏側には、親の過去の時代における家庭生活の中での生活経験というものが依然として強く効いていることを否定するわけにはいかない。

本研究は、母親達の過去に経験した親子関係なり、生活経験というものが、現在の子どもの関係に如何様に持込まれ、それを規制しているかということを実証的に明らかにしようとするものである。

方法：本来こうした母親の心理の深層にまで調査が及ばねばならぬ研究は、長期にわたる面接やテストなどを用いた詳細な資料を収集することが前提とならねば、その実態を把握することは困難であるが、今回はその第一段階として幼稚園児の母親を対象にし、質問紙により母親自身が生育時に自己の家庭において経験した両親の態度、それに対する印象などに関する調査を行なった。

質問紙は幼稚園を通じて配布し、回答を求めた。対象とした幼稚園は四ヶ所、計八百名を対象として行ない、六百六十七名の回答を得た。

質問紙の内容は、A、B、Cの三つに大別

され、Aは両親に対する印象で、厳格さ、親和感、子どもに対する関心、理解、神経質、几帳面さの六項目からなり、Bは母親が両親から受けた具体的な態度に関する項目を中心とした十四項目、Cは現在の家庭で母親自身が子どもに対して行なっている態度に関した十二項目、計三十二項目から成っている。BとCは両者の関連をみる意味で同一の内容を項目にもった。

結果：結果の分析は質問紙の内容を互いに関連させると共に、幼稚園の受持教師に母親の育見態度を厳格型、放任型、溺愛型の三つについて評価させ、その極端なものについてのみ、育見態度と両親に対する印象、出生時の両親の年令、兄弟順位などの関係について検討を行なった。

最初に母親の両親に対する印象と母親出生時の両親の年令との関係についてみると、父親に対する印象の場合は、年令が上の父親ほど厳しかったという印象を与えている。しかし母親の場合には年令による厳格さの違いはみられず、母親出生時の年令が三十一才から三十五才までの間の母親が他の年令段階の母親に比較して、厳しい親も、甘い親も少ないという傾向がみられた。

親に対する親和感という点では、若い父親が親和的存在として印象づけられており、年配の父親は口やかましく親和的でないものが多いという結果がみられる。母親の場合には出生時年令三十一才から三十五才の母親が最も親和的な印象を与えている。

子どもに対する関心の深さ、理解のあるなしという点では、父母共に出生時年令三十六才から四十才の間のものが最も子どもに関心

が薄く、理解がなかつた存在となっている。

神経質という点では、出生時年令三十三才から四十才の間母親が最も神経質な親として母親に印象づけられている。

同様のことを母親の原家族における兄弟順位を一人っ子、長子、中間子、末子の四つに分けてみると、厳格型という点では、父親は中間の子どもに厳しく、一人っ子、末子には甘い傾向がみられる。母親の場合には、どのような兄弟順位による差はみられず、一律に親和的存在として印象づけられている。

子どもに対する関心、理解という点についてみると、長子として生まれた母親は親を自己に深い関心をもちてくれているとしている者が多いが、中間子として生まれた母親は、父親を子どもに関心の薄い、理解のない存在としていている者が多い。

次に母親が原家族において親から受けた躰と現在の家庭において母親自身が子どもに対して行なっている態度との関連についてみると、一、二の傾向を除いて母親は自分自身が原家族の中で受けた躰と同じ躰を現在の家庭でも行なっている傾向がみられる。

関連の深い項目を次にあげると、物を大切に扱えという躰、体罰の使用、風邪などの際の扱い、弱愛的な援助、遊び相手、家族全体での団らんなどがあげられる。

幼稚園の教師の評定による問題の親の両親に対する印象についてみると、溺愛型の母親は父親を溺愛的だったとする者が多く、厳格型の母親の場合には両親とも厳格だったと答えているものが多い。

両親に対する親和感という点では、溺愛型の母親は父母共に親和的だったと答えたものが多いが、厳格型の母親には、父親に冷たい印象をもっているものが多い。

子どもに対する関心、理解という点についてみると、溺愛型の母親は父母共に理解ある親だったと答えたものが多いが、厳格型の母親には親を理解のない親だったと答えてい

るものが多い。つまり親から理解のなり扱いを受け親が再び一方的に厳しい態度で子どもに接しているわけである。

几帳面さという点についてみると、厳格型の母親は両親共に几帳面な親だったと答えたものが多い。几帳面な扱いを親から受けた母親が厳しい親に成長する率が高いということが云えよう。

以上の結果からみて、出生順位や出生時の親の年令によって、親に対する印象というものは大きな相違がみられることは明らかであるし、生育時に親から受けた扱いを再び踏襲する傾向が親の躰にはあり、過去における親子関係を再び現在の母子関係に持込む可能性が非常に大きいと云えよう。何れにしても、母親の現在の態度なり、子どもとの結びつきというものが、過去の家庭の中で経験した親子関係というものによって大きく影響されるということは事実である。今後更に種々の調査を行ない、原家族における生活と現在の母子関係とのつながりについてより深く究明してゆく予定である。